

人も自然も共に生きる

ESD × 生物多様性しんぶん

2009年秋号

ESD-Jでは、生物多様性保全と生業を両立させる国内の取り組みを、人づくりの視点から文書化し、事例をもとにハンドブックや生物多様性条約第10回締結国会議への提言を作成する「ESD×生物多様性」プロジェクトを実施中。この「しんぶん」で、プロジェクト成果や関連情報を紹介しています(季刊発行)。

動き出した! 「ESD×生物多様性」プロジェクト.....

全 国9ブロックの地域窓口を担うESD-J会員や各地域の環境パートナーシップオフィスのESD担当者など20名が、9月10日東京のESD-Jの事務局に集まり、「ESD×生物多様性」プロジェクト第一回地域窓口担当者会議を実施しました。

各地域で事例として取り上げる活動を共有し、プロジェクトの目標、進め方、事例を執筆する上で大切にしたい視点について、まる一日かけて、じっくりと議論しました。

当プロジェクトの主な目的の一つが、生物多様性条約第10回締結国会議(CBD/COP10)へのESD分野からの貢献。プロ

ジェクトで取り上げる事例が、国内のみならず、アジア・アフリカの持続可能な地域づくりにも役立つものであるようにと、過去のCBD/COPの議論における教育の位置づけや、また生物多様性保全に根差した地域づくりの国際的な取り組みについての情報も、会議で共有しました。

各地の窓口担当者からは、干潟を地域の共有財産にしていくための活動や、高校生による里山保全活動、里山や干潟などの開発をめぐる合意形成のプロセスの明確化、先住民族の権利回復など、多様な事例候補があげられました。(詳細は裏面参照)

会議終わりには、以下のような視点を事

例執筆に盛り込むことで、国内外の地域で活動する・したい人に役立つハンドブック・提言作成に結びつくのではないかという意見が活発に交わされました。

- ・生物多様性保全に根差した地域づくりに、どうE(教育・人づくり)の要素が組み込まれ、どうい効果をあげているのか
- ・地域の生態系を守るために地域独特のやり方とは何か
- ・活動が、人の心や人と人とのつながりにどう影響を与えたのか
- ……今後のプロジェクト展開に、乞うご期待!



せいぶつたようせいQ&A.....

**人と自然が折り合う
地域づくりに向けた
国際的な取り組みには
どんなものがありますか?**

回答者▶
国連大学高等研究所(UNU-IAS)上席研究員

名執芳博さん

里 山は、我が国において長年にわたりて人が地域の自然に農林業や生活を通じて働きかけ、土地や自然資源の持続的な利用・管理に工夫を重ねてきた地域です。しかし、近年の都市化、エネルギー革命、グローバリゼーション等社会経済状況の変化により、人と自然の関係が崩れ、地域の荒廃も多く見られます。また、里山に普通に見られた野生動植物が絶滅の危機に瀕するようになったりしています。

日本の里山のような良好な人と自然の関係により維持・形成されてきた地域は、世界各地に見られ、同じような問題が起こっている地域があります。また、地球上の野生生物種の半分以上が保護地域外に存すると言われるなど保護地域外における生物多様性の保全も重要な課題となっています。

このような背景から、日本政府(環境省)とUNU-IASでは、「SATOYAMAイニシアティブ」を世界に提唱し、生物多様性条約第10回締結国会議(CBD/COP10)において本イニシアティブにかかる国際的なパートナーシップを立ち上げるべく取り組ん

でいます。すなわち、里山的な人と自然との関係性を再構築することによって、自然資源の持続可能な利用を目指すことは、特に途上国の人々の生計の向上に寄与し、食糧安全保障、貧困削減、地球温暖化などの地球規模の問題の解決にも貢献するとともに、生物多様性の保全と持続的な利用に貢献するものと考えています。

一方、2001～05年に世界の95ヶ国から1360人の専門家の協力を得て、地球上の生態系の健康診断として「ミレニアム生態系評価」が行われました。生態系から人々が得る恵みを生態系サービスと呼び、これを評価しています。その際、地球規模の評価と並行して、世界の34地域でサブグローバル評価が行われましたが、日本においてサブグローバル評価が行われていなかったこと、我が国の国土の約40%が里山であることから、UNU-IASでは、日本における里山・里海サブグローバル評価(SGA)を日本の専門家の協力を得て実施し、COP10において成果を公表すべく、取り組んでいるところです。また、SGAの結果は里山イニシアティブに科学的な根拠を与えることも期待されています。



マレーシアでのSATOYAMAイニシアティブ第二回ワークショップ、事例見学の様子

「ESD×生物多様性」で取り上げる予定の地域活動

地域窓口担当のESD-J会員が、1月上旬までに以下のような事例執筆・ワークショップの開催をし、2月13-14日のCBD/COP10プレミーティング(東京)で成果を共有します。

北陸

鈴木克徳

[金沢大学]

事例地域：石川県能登半島地域、

富山県富山市呉羽丘陵地域等

北陸では里山の保全を中心に様々な生物多様性保全に資するプロジェクトがあります。今回は、そのうち、能登への営農者の定住を目指す金沢大学「能登里山マイスター事業」、産官学民の様々なステークホルダーが一緒になって呉羽丘陵の里山保全を目指す「悠久の森」事業等について紹介します。



中国

池田満之

[岡山ユネスコ協会] &

志賀誠治

[ひろしま自然学校]

事例地域：岡山県旭川流域

(上流域、中流域、下流域、河口域)

中山間地と海辺のどこにでもあるような農村で行われている、「学校と地域が連携して生物多様性の視点を入れた地域づくり・人づくり(ESD)」をベースにした、農村と都市との持続可能な共生社会を目指した活動を取り上げます。



九州

浜本奈鼓

[くすの木自然館]

事例地域：鹿児島県重富干潟

「鹿児島湾奥干潟を中心とする周辺海域の生態系保全再生」また「干潟とその流域を含む周辺地域住民の意識啓発」を、産・官・学・民・NPOが協働で行なう活動を紹介。多様な分野の人々が、共通のビジョンを持って活動できるよう、フィールドワークを含むワークショップを行なう予定です。



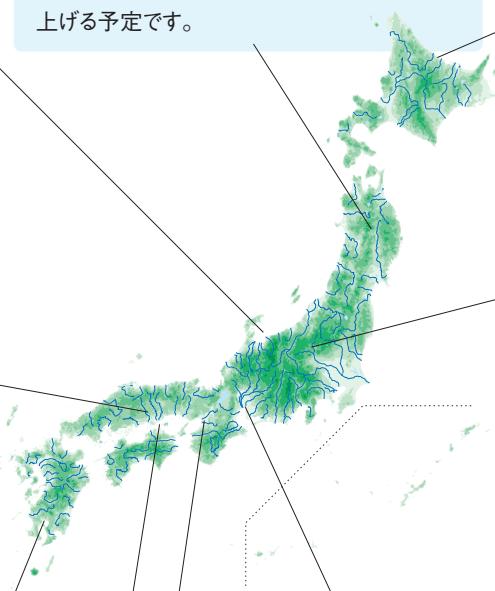
東北

梶原昌五 [東北大学]

事例地域：多様な活動があり、

どこを取り上げるかを検討中

東北の課題は、生物多様性がとことん保存されているにもかかわらず、地域経済が自立していないこと。地域はいまだに公共工事という名前の大企業からのおこぼれを求めています。ここで、生物多様性と地域経済の両立を目指して住民が自ら立ち上がったという活動を取り上げる予定です。



北海道

小泉雅弘

[さっぽろ自由学校「遊」]

事例地域：北海道紋別市オホーツク海沿岸

この地で長年漁師を営んできた畠山敏さんのアイヌ民族の復権と海を守るためにひきつけながら、先住民族の権利回復と生物多様性を結びつけた活動展開の可能性を探っていきたいと思います。



近畿

下村委津子 [環境市民]

*地域ワークショップの開催のみ

地域の宝(自然、人、もの)を引き出し發揮できる機会を創出することが持続可能性を高めるのでは…。近畿では、ひとつの事例を掘り下げるのではなく、生物多様性を視野に入れた持続可能な地域づくりに取り組む人々が集い「ESD×生物多様性」に必要な視点や取り組み方のヒントを探ります。



関東

芝小路晴子

[日本自然保護協会]

事例地域：群馬県赤谷の森

2004年度から実施の「AKAYAプロジェクト」。10年以上にわたる保護運動の末にダム・スキー場開発から免れた約1万haの国有林で、林野庁関東森林管理局・赤谷プロジェクト地域協議会・当会の3つの中核団体が協働して、生物多様性の復元と持続的な地域づくりに取り組んでいます。



四国

萩本篤義 [いきいき小豆島]

事例地域：香川県豊島(てしま)

豊島は産廃の島として有名ですが、本来は名前の通り、大変自然の豊かな島です。その自然に魅せられ、二度とこのような問題が起きないようにと願う島の内外の人々が協力し合って、棚田の再生や、豊島をまるごと学ぶための「島の学校」のイベントが行われています。



中部

村瀬俊幸

[「心のアラスカ」～星野道夫の思いを繋ぐ]

事例地域：愛知県藤前干潟

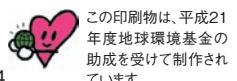
ゴミの埋め立て処分場建設予定地であった藤前干潟を保全に導いた過程から、ESDの重要な手法である対話・合意形成のあり方をまとめます。特にターニングポイントなった出来事を抽出し各ステークホルダーにヒアリングすることで、交渉・ファシリテーション・調停調整の過程を明らかにします。



発行：特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

編集：ESD-J 地域プロジェクトチーム <http://www.esd-j.org> e-mail: admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554



この印刷物は、平成21年度地球環境基金の助成を受けて制作されています。

レイアウト：宮部浩司